

余の特性發揮徑路

東京美術學校
教授 黒田清輝君

余が繪畫を稽古する様に爲つた動機は細まかく調べたならば色々な事情があつたかも知れない、けれども今日現はに自ら認めるとの出来る動機は唯だ一つの「野心」であつた、人間の中で最も立派な者に爲りたいとの野心であつた。多くの青年時代に屢々見る如く、余も青年時代には全く野心の爲めに驅られて居た。初め法律を學ぶ爲めに佛蘭西に行つて、巴里の法律學校で法律學を研究して居た。之も全く唯だ一つの野心の爲めであつて、當時の思想を追想するに、人間の光榮の花と見るべき者は政治家である、故に人間の中の最も立派な生涯を送らうとするならば政治家の外はない、と云ふ様な考を以て政治家を志望して居た様である。立派な生涯と云ふとも高尚なと云ふ意味ではなく、花々敷社會に目立つ生涯と云ふ積りで政治家を志望して居た様である、所が留學中に何時となく政治家を止めて畫家として世に立たうと云ふ氣に爲つた。之には色々な事情があるが、第一は同時代の留學者の連中は多くは繪を學びに来て居る、故に友人相寄れば堅苦しい法律の話よりも繪の話が多い、而して余は元來繪は好きであつたから自然其談はなに釣り込まれては法律よりも繪を學び度いと云ふ様な氣が段々と起つた様である、第二は留學以前に日本に在る間にも屢々日本畫の大した物を見るとはあつたが然かし學び度いと云ふ氣は起らなかつた、所が佛蘭西に行つてあちらの繪の大した物を見ては、其雄大など、華麗など、莊嚴など實に感服した、始めて繪の眞の趣味を解しては、斯様な繪を畫いて見たいと云ふ氣が續々と起る、又第三は幼少にて學校

に在る頃より外の課業よりも畫が最も勝ぐれて居たが、此留學時代に在つても法律を以て世に立つよりも繪を以て立つ方が自分には容易であると信じて居た、であるから繪で以て立派に世に立ち得ると信じて居たとは政治家の方を信じて居たとよりも幾倍強くあつた。つまりあれや之れやで法律を止めて繪の方に變つた譯であるが、それと云ふも名高く爲つて立派な生涯を送らうと云ふ野心を離るゝとは出来なかつたからである。

元來繪は小供の時より好きであつた、十二歳の頃より姉が繪の稽古を爲て居るのを見て自分も其傍にあつて稽古を爲て居た。好きではあつたけれども繪かきに爲らうとは少しも考へて居なかつた。十四五歳の頃に父は、それ程畫が好きならば本統に畫の稽古を爲るが善いであらうと云つて、先生を定めて呉れた。それより其人の弟子に爲つて鉛筆畫水彩畫を稽古したが、自分で畫いて、先生に見て貰うので、實にこんなとを遣るのは下らないと其頃にも思つて居た、であるから十六七の頃よりは最早や繪の稽古を止めて外の方に移つた。其頃でも繪だけ以外の同輩よりも善く畫けたものであり、又學校でも外の學課より繪の方は善い點を取つて居た、少しも骨折らずに割合に善く出来るのであるから勿論不熱心ではなかつた、天性繪は畫ける様に生れついて居たのかも知らぬが自分ではさうとは少しも認めては居なかつた、父は繪書きに爲た方が善いと云ふとに氣が付いて居たのであらう特に先生までも定めて呉れたのであるけれども、自分では何うも繪書きに爲るなどは下らないと思つたので終に中途他に轉じた、つまりせまい量見で一種野心に迷はされて居た譯であらう。

斯くして繪を學ぶ様に爲り段々と天然と云ふとを解するものが出来た、天然には定まりがあり人には人各々の分がある。と云ふとが判る様に爲つて、自分が今まで淺慕な野心に迷はされ虚榮心に驅られて居たとは甚だしく愚で

あるを覺るに至つた。由來、自分は社會の一員であり天然の二分であることを考えずに、唯だ自分を標準として自分の判断より割り出し自分だけのとを考へて希望を立て、居た、即ち此廣い社會には色々の特性を具へて居る者が大勢打寄つて種々の職業を分擔して居るものであるから、自分は其中の何を引受けるかを善く吟味して、其一分業を忠實に守ると言換れば各自の天性の長ずる所を發見して、その特性を出来るだけ發揮せしむるが人の此の世に在る天分で、之が又各人成功の要訣であるとは少しも考え及ばず、唯だ外觀的に華やかな生涯を送つて居る者を見ては自分だけあの様になり度いと思ひ、法律を修めて大政治家に爲つて居る人を見ては自分も其通りに修業してさえ行けば同じ様になれると信じて居た、實に危険千萬などであつた。既に自分の最上を盡くして天性の能ふだけを發揮せしむるのである、自分の行く道は之より外にはないと定まつた道を熱心に忠實に進み行くのであれば失意とても何の悲む所はないではないか、得意とても何の驕る所あるべき筈はないではないか、余は早く此處に氣が付いたのは幸であつた、而して又自分の天性に相應した物を發見するとの出來たのは一層の幸であつた、何人も青年時代には一種の虛榮心或は野心の爲めに迷はされるを免れない、而して此虛榮心が多く勉強の第一の動機と爲つて居る。勿論或程度までは之で進むとが出來る、即ち其動機より出でたる勉強の力で以て其野心を或程度までは充たすとは出來やうが、然し天性に反抗しては到底或程度以上に上るとは出來ない。要するに自己の特性に背いた生涯を送る者は畢竟苦痛の生涯である。

一體、畫道も一つの職業であるから、畫家と云つても必ずしも仙人染みた生活を送る必要はない。所が歐洲でも畫家の生活には自づから二流がある、一つは豪華な生活を爲て居る者で之は堂々たる邸宅を構へて常に馬車を

驅つて出入して居る。他の一つは極めて仙人染みて一見百姓乞食の生活を爲て居る。而し修道上より云へば何ち
 らの方をも故意にまねる必要はない、生活状態は必ずしも其人の技倆進歩に關係はない様である、自分の好きな
 生活を送つて居れば宜い、心中苦しいながら力んで或は豪華な生活とか仙人染みた生活を送らうとすることが修
 道上飛んだ間違いかと思ふ。唯だ之までの統計上より出へば絶大の大畫と云はれて居る物は、名を成して立派な
 生活を爲て居る得意の大家の手より成る物よりも、失意で百姓の様な日暮しをして居る畫家の手に成つた物が多
 い、幾度も展覽會に出しては落第したと云ふ難癖附きの物に飛び抜けた大作の出る事が多い。又時代の上より云
 へば斯様な場合に大作が出る、それは時代々々の思想の變り目に潮流の大勢を一步先きに見て新思潮を導かうと
 云ふ見識より筆を執る、此場合である。例へば最近クラシツクより自然派に移り寫實派に變つた場合などが皆此
 の通りである、その當坐では攻撃され壓迫され迫害せられるとが甚しい、と云ふものは其場合に之を判斷する人
 は皆舊思想の人のみであるから新規の物を好まないは當然である、所が社會は進歩を好むものであるから、舊思
 想には飽き果て、新思想を渴望して居る時であれば、其斬新奇拔なる大作は、當然之を歓迎するに至るべきであ
 るが、之が歓迎せらるゝに至る迄には常に少からぬ犠牲を拂つて居る。

畫を學ぶ順序としては余の教える處では先づ石膏より始めて人體の稽古と爲る、それが十分に出來てそれより
 景色を學ぶ、景色が十分に畫ける様になつて製造にかゝるが順當である。製作に入れば面々の好みが違ふから一
 概には云へない、例へば理想畫で云ふならば先づ空な問題即ち天とか地とかの問題を捉えて來てそれに思想を畫
 き現はすとか、或は歴史の時代の出來事を捉えて來て想像を以て時代精神を畫き現はすと云ふ様な遣り方もあ

る、最早や斯様になれば面々の思想で自由自在に腕を揮ふべきで型に入れて活すとは出来ない、余は常に佛のユ
 ゴーの「乞食」の詩を愛讀して居る、其「乞食」と云ふのは、一少年乞食が路傍に立つて憫れに悲し氣な聲を爲て路
 行く人に袖乞を爲て居る、所が客が通過れば直ぐに朗らかな聲で樂しげに歌つて飛び歩くと云ふ詩である、何で
 もない様であるが、乞食でも其天然を壓へるとの出来ないと云ふ眞情が何んとなく現はれて讀む者をして一層の
 憫れを覚えしめる、畫家も或題目を捉えてそれを善く理想化するとに於て縱令之程には行かなくも成るべく高尙
 な趣きを畫き現はすに勉め度いものと思ふ。縱令題目は乞食でも、十分に觀察して其眞趣を遺憾なく書き現は
 さうとするには非常に高尙な能力がなくてはならん故に徒らに畫の表面その物のみを觀て、高尙だの下劣だのと
 一概に排斥するとは大なる間違である、よしや題目は天女美神であつても畫家に高尙な理想幽雅なる品性がなく
 ては其天女美神でも非常に劣等なものに見えるは當然である。

故に畫を學ばんと爲る者には第一觀察力の精確なものでなくてはならん能く人の思想や物の體系を分析して考
 え、微細な點を自然に簡單に畫き明はすの能力がなくてはならん、第二は品性である、如何なる卑賤な物や微細な
 物でもそれを己れの高尙な思想の中に理想化し美化して莊麗なる又雄大なる面目を躍如たらしむる丈の技倆がな
 くてはならん、要するに自己の品性が題目を假りて現はるゝに過ぎないものであるから、その人が少しでも下卑た
 根性や浮薄なる虚榮心などある位のものならば到底眞の作物を出すとは出来ない。草の葉に風が觸つてそよ／＼
 せるそれだけでも本統に寫すとが出来れば立派な畫家である、又それが本統に寫せたならば非常な愉快なもので
 あらう、要するに繪其物を樂む心掛けがなくては畫家に爲る資格はない。

『成功』二二三明治四〇年九月一〇日